

ホスピスにおける観望会

尾崎勝彦

ホスピス緩和病棟の多くはガーデンや池などの自然に触れることのできる設備が具備されており、患者さんやご家族の心の和みの一翼を担っている。草花等の身近な自然だけではなく、もっとも遠い自然である天体にもそのような役割を果たすであろうことが予測される。そこで天文のアウトリーチ活動としてホスピス病棟での観望会を試行錯誤的に行っている。本報告では、その実施状況および患者さんら参加者から得た感想や意見を紹介する。

1. 実践対象

ホスピス病棟入院患者さん、およびそのご家族を対象とする。場合によっては病棟スタッフも含まれる。入院患者さんのADL(Activity of Daily Living ; 日常生活動作)は、様々で、自力歩行可能な方から、ベッドに寝たきりの方、さらには、手が自由に動かない方など。

2. 実践可能な場所、必要な道具や準備

ホスピス病棟に器材を持ち込んで実施している。ホスピス病棟はたいていが病棟続きの戸外にガーデンが具備されており、ガーデンで望遠鏡や双眼鏡を覗いてもらう、あるいは肉眼で空を眺めてもらっている。以前は曇天時や冬季は室内で投影画像を見てもらっていた。しかし、室内での「本日の星空」の説明が伝わりにくいこと、および患者さんが戸外に出て来れる時期—5月、7月、9月—に実施することになったことから、それ以降は曇天時でも戸外(=ガーデン)で行うようにしている。実際に空の方角を示しながら、「晴れていれば、こちらの方向に、このような星が見えます」といった説明ができるので、分かりやすいと思われる。

自力歩行可能な患者さん、ご家族、および一部の車椅子参加での患者さんには普通に望遠鏡を覗いてもらっている。ベッド参加、車椅子参加の患者さんには、望遠鏡の支点をずらして、接眼レンズ側を長くし、かつ、患者さんの身体を支えながら覗いてもらう、あるいは、サイドテーブル上に小さな三脚+コルキットのような小さなシステムを置いて覗いてもらってはいるが、患者さんのADLの程度により、覗いてもらえない場合も多い。そのような場合は双眼鏡を覗いてもらっている。手の不自由な患者さんに対しては、ボランティアが双眼鏡を持って覗いてもらうことを試みているが、これはうまく行かない。

器材の工夫の問題もさることながら、病棟、とりわけホスピス病棟に天文ボランティアが入り込むこと自体がすぐに病棟側に受け入れられるものではないことは、覚悟しておく必要がある。通常、ホスピスボランティアは、研修(座学と実習)を受けた後に、病棟での活動が許されている。筆者の場合、もともと病棟ボランティア(患者さん、ご家族へのティーサービス、話をする、など)を長年行っており、病棟スタッフとの信頼関係が既に築かれていたため、天文ボランティアとしての活動も可能になったものと考えている。天文ボランティアは、音楽家のような専門ボランティアに位置づけられる。専門ボランティアは、病棟でのイベント時(コンサート、夏祭り、お月見など)に招かれることが多く、その専門性が問われるので必ずしも研修は必要でない。イベントの1つとして、観望会というオプションもあることをボランティアリーダーやコーディネーターに伝えていくことから始めるのがよいと考えられる。

3. 実践例

表 1 に実施記録を示す。結果的に天候には非常に恵まれなかった。第 3 回目の「不戦敗」は、寒空のため当初から室内プログラムの計画であったことを示す。第 3 回目までは第 4 節で述べるように「押しかけ」的位置づけであったが、第 4 回目以降は病棟の年中行事として位置づけられ、戸外(ガーデン)で寒くない 5 月、7 月、9 月に行くことになった。

表1 ホスピス観望会実施記録

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
実施日	07年9月24日(月・祝)	08年8月16日(土)	08年11月29日(土)	09年7月29日(水)	09年10月3日(土)	10年5月31日(月)
天候	曇り→雨	曇り、瞬間晴れ間	不戦敗	曇天	晴天	曇天
ボランティア	6名+2名(非天文)	6名	5名	6名	2名+1名(非天文)	4名
患者参加者	3名 -車椅子2名 -自力歩行1名	6名 -ベッド3名 -車椅子2名 -自力歩行1名	3名 -ベッド2名 -車椅子1名	2名 -車椅子1名 -自力歩行1名	3名 -ベッド2名 -車椅子1名	2名 -ベッド1名 -自力歩行1名
その他の参加者	家族3名 病棟スタッフ5,6名	病棟スタッフ3名	家族3名 病棟スタッフ2名	病棟スタッフ5,6名	家族9名 病棟スタッフ2名	家族2名 病棟スタッフ3名
開催場所メニュー	<室内> NASA Picture of the day 本日の星空(ホームスター)	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(Mitaka) <観望対象> 木星・月	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(ステラナビ) 絵本朗読	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(Mitaka)	<ガーデン> かぐやハイビジョン映像 <観望対象> 木星・月	<ガーデン> 南アフリカ写真 Mitaka(本日の星空+離陸モード) Powers of ten

図 1 に、曇天時に戸外で画像投影を行っている様子を示す(第 6 回)。2 台のプロジェクターを用いて、それぞれ趣の異なる画像を投影した。向かって左側が MITAKA による本日の星空で、右側が南アフリカの写真である。当初スクリーンを立てて行おうとしたが、戸外のためスクリーンが風にあおられ転倒する恐れがあることが分かったので、病棟壁面投影とした。図 2 は、望遠鏡の支点をずらしてベッドの患者さんに覗いてもらっているところである。しかし、この試みは成功せず、さらに患者さんの上体を起こし、背中を支えることによって覗いてもらうことができた。

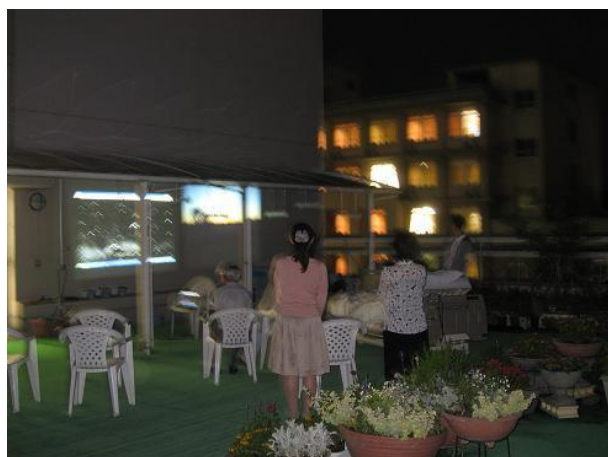


図 1 戸外で画像投影



図 2 ベッドの患者さんに覗いてもらう

4. 実践上役立つヒントや留意点

病棟での観望会は、公開天文台や街角で行われる観望会とは以下のような点で異なっている。

- (1) 参加者が原則として健康体でない、低 ADL であること—観望者の姿勢の制限が非常に大きいことが最大の問題である。
- (2) 一般の観望会のように、「星を見たい」という強い動機付けをもって参加されるわけではないこと—ボランティア側が「押しかけている」ことの謙虚さを持つことが要求される。
- (3) 多くの参加人数が望めないこと—ボランティアの一つの役割は、病棟に「世間の風」を持ち込むことであるので、参加者が 0 人であっても粛々と遂行することが要求される。

また、より良いプログラムを目指すために、観望会やりっぱなしではなく、体力的に問題なく、また了承の得られた参加者に、後日必ず感想等を尋ねるようにしている。

5. 実践例の評価—患者さんらの感想と方針の振れ—

患者さんからは、「病棟でこのように星が見られるとは思っても見なかった」、「神秘的な雰囲気で良かった」、「一般的な夏祭りのような行事よりも良かった」、などの概ね肯定的な感想もいただいている。中にはボランティアに感謝の手紙を書いて下さった方もおられた。その一方で、「説明が難しい、知識がないとわからない」、「疲れたが中座しにくかった」、「あまり興味はない」などの厳しい感想もいただいている。否定的な感想は特に第 4 回目に多く出された。この会の特徴は患者さんが少ない(2 名)かわりにボランティアや病棟スタッフが多かったことである。そのため、患者さんを心理的に圧迫したいたものと反省される。

そこで、第 5 回目以降は、積極的な説明をなるべくせずに星の姿や映像そのものを感覚的に楽しんでもらうこととし、いつからでも参加でき、いつでも退席できるような雰囲気を目指すと共に口頭でもその旨を伝えるように心がけた。また、曇天時は少人数のボランティアで活動することとした。幸い、第 5 回は天気にも恵まれ否定的な感想はいただかなかった。しかし、第 6 回の参加者からは、患者さん、ご家族、スタッフ共に「もう少し説明が欲しかった」という意見が寄せられた。但し、この会は全般的な印象として「よかった」という評価をいただいた。これは、曇天プログラムながら、戸外で行ったことが効いていると考えられる。

6. まとめと今後の課題等

ホスピス病棟で試行錯誤的に観望会を開催し、概ね肯定的な評価をいただいている。説明方針やプログラムなど今後も感想・意見をうかがいつつ臨機応変に対応していきたい。また、ベッドや車椅子の患者さんがうまく覗けないという重要課題があり、ファイバースコープやベッドのまま覗ける架台の作成など今後検討していきたい。

さらに、死と直面するデリケートな場所であり、そして天体は何万年、何億年という自己の死を前提とした時間的スケールの話題を含む。このことが患者さんやご家族の死に対する不安を喚起しないともかぎらない。そのような場合にも患者さんらとコミュニケーションが継続するように、天文ボランティア自身の死生観をある程度は醸成しておく必要があるだろう。

7. ホスピス観望会を行うに至った背景

自己の死への対処は人生最大、そして人類最大の問題の一つである。その問題から日夜逃れることなく取り組んでいるのが末期患者さんであろう。認知神経科学者のラマチャンドランは「人間は自分が死ぬ運命にあることをはっきりと自覚し、死を恐れている。しかし宇宙の研究は、時間を超越した感覚や、自分より大きなものの一部であるという気持ちを与えてくれる。自分が進化する宇宙という永遠に展開するドラ

マの一部であると知れば、みずからの命に限りがあるという事実の恐ろしさが軽減されると延べている[1]。一方、筆者はかつて公開天文台で一般健常者を対象とした観望会参加者に質問紙調査を行い、観望会後に参加者の気分状態が改善されることを報告した[2]。

そこで、筆者らはホスピス入院患者さん・ご家族に少しでも良い時間を過ごしてもらうことを目的として、天文台などの研究者やアマチュア天文家に呼びかけ、天文ボランティアを構成し、病棟での観望会を始めた。

8. 参考文献

[1] Ramachandran V.S. & Blakeslee S. 2000 Phantoms In The Brain 山下篤子 訳、「脳の中の幽霊」pp206

[2] 尾崎勝彦:天体観望会による情動変化, 天文教育 18(2), 2-11, 2006